

## シャルトル司教フェルベールの一書簡の解釋の試み ：十一世紀の”封建制”の解明に寄せて

森, 洋

<https://doi.org/10.15017/2244120>

---

出版情報：史淵. 100, pp.195-217, 1968-03-01. 九州大学文学部  
バージョン：  
権利関係：

# シャルトル司教フルベールの一書簡の解釋の試み

— 十一世紀の「封建制」の解明に寄せて —

森 洋

序

J.-F. Lemaignier の最近の労作 *Le Gouvernement royal aux premiers temps capétiens (987-1108)* は、いわゆる《Fidèles ou Vassaux》<sup>(1)</sup>の問題の再検討から出発したが、初期カペー諸王の文書のうちに顯著に認められる形式上の變化が、彼自身も最初は予想していなかった新しい視野をひらいた。<sup>(1)</sup>その変化とは、九八八年以後、カロリング形式の王書の数が次第に減少して、比較的狭い範囲の側近によって構成される宮廷の、副署者 (souscripteurs) の名前が列挙されている王文書の数が増加する<sup>(2)</sup>にいたることである。Lemaignier はこの旧形式 (ancien type) から「多副署文書」(diplômes à souscriptions multiples)へと文書数の比重が転換した時期を、一〇二五—一〇二八年に置き<sup>(3)</sup>さらに文書の副署者とその宛先とを、図表と地図とによって統計的に処理することにより、十世紀末から十二世紀初にいたる間の《gouvernement royal》を解明せんとしたのであるが、さしあたり我々にとっては、この一〇二〇年代という時期が重大な意味をもつ。何となれば、封建制を考える際に一つの判断基準となる、封臣関係 (relation fodo-vassalique) を形成する法行為 *hommage* をしめす語 (*hominium, hominaticum, etc.*) が出現した時期を、F.-L. Ganshof が一〇三〇年代以前にはさかのぼり得ないとした<sup>(4)</sup>からである。<sup>(4)</sup>上記の《Fidèles ou Vassaux》<sup>(5)</sup>の論争は、十三世紀に《pairs de France》を形成する六俗諸侯 — ducs de Bourgogne, de Normandie et de Guyenne, comtes de Flandre, de Toulouse et de

Champagne——と十、十一、十二世紀の *principes regni* との連続関係を問題にしている。即ち、後者はさらに九世紀の職 (*honores*) 保有者の末裔であり、何れも当時の史料が《*fideles*》と呼んでいるものであるが、これらが実質的に王に対して《*vassi, vassalli*》であったか否かが争われた。このことは同時に、カロリング朝期の《*fideles*》が王に捧げた *commendatio* と忠誠誓約 (*fidelitas*) が、その形成と効果とを通じて、十三世紀の *foi et hommage* と比較されることとなる。<sup>(6)</sup> この問題を念頭において、一〇二〇年代における王文書形式の変化——即ち、王の《*gouvernement*》の変化——と、一〇三〇年代におけるテクニカルターム *homage* の出現とを見なおす際に、これらの意味するところは極めて重大である。こうした現象は、狭義の「封建制」の成立と、決して無縁ではあり得ないであろう。

こうした観点から我々は、何らかの方法で一〇二〇年代の断面図をとり、これに検討を加える必要に迫られた。そしてその素材としては、封建的君臣関係を定義したものととして極めて有名な一書簡をとりあげた。即ち、一〇二〇年にシャルトル司教 Fulbert (1007-1029) が、マキテーヌ侯 Guillaume V, le Grand (993-1030) に宛てた書簡である。<sup>(7)</sup> この書簡の分析は、一〇三三年頃に、シャルトル伯 (フロロ伯) Eudes II (1005-1037) がフランシス王 Robert II, le Pieux (996-1031) に宛てた書簡によつて、ある結論に導かれるのであるが、これらの両書簡は何れも、テキスト・翻訳ともに数度にわたつて発表され、上記の分野を扱った諸研究に、必ず言及が見られるものである。以下の分析の試みは、これら二書簡が何れも、Fulbert の手で書かれたと云う可能性によつて、一層正当化されるであろう。

註(一) J.-F. Lemarignier, *Le Gouvernement royal aux* (2) Lemarignier, *op. cit.*, p. 42, 44 et suiv.

*premiers temps capétiens* (987-1108), Paris, 1965, (c) *id.*, p. 68 et suiv.; tableau des catégories de diplomes, 新形式 (type nouveau) 文書の全文書に対する比率概算

p. 7-8. 《*Fideles* ou *Vassaux* ?》問題にこづな、後註(5)

参照。 年(1/2) / 1031-1060年(2/3) / 1060-1077年(7/8) ↓

480°

- (4) F.-L. Ganshof, *Note sur l'apparition du nom de l'hommage partiellement en France*, dans *Annuaire Mitelalter und Neuzeit, Festschrift f. v. Gerhard Kallen*, Bonn, 1957, p. 29-40; cf. Ganshof, *Qu'est-ce que la féodalité?* 3<sup>e</sup> éd. revue et augmentée, Bruxelles, 1957, p. 98. ノートンに因るべし一〇三〇年を以てフランスの comté de Barcelone なるもの (Ominaticum) の初出は一〇一〇年である。

- (5) 《Fidèles ou Vassaux?》論争は、本文の如く十三世紀の六 grands vassaux 及びカロンが朝期の comtes 等の honor 保有者、十一世紀の史料が《Fidèles》或は《principes, primores, proceres》と書えしもの存在が、等しい法的紐帯を以て結ぶにけらるべしなることを論ずる論争である。F. Lot, *Fidèles ou Vassaux? Essai sur la nature juridique du lien qui unissait les grands vassaux à la royauté depuis le milieu du IX<sup>e</sup> jusqu'à la fin du XII<sup>e</sup> siècle*, Paris, 1904,—Aug. Dumas, *Encore la question «Fidèles ou Vassaux?» A propos du quatrième volume des Origines de l'Ancienne France de M. Flach*, N.R.H.D., 1920, p. 159-229, 347-390. は「伝説的学説」(théorie traditionnelle) にあらずして、われらが終始愛らるべき

hommage なるもの《lien étroit》と結ぶべからざらば、vassaux であるものも主權した。これは故に J. Flach, *Les origines de l'ancienne France, X<sup>e</sup> et XI<sup>e</sup> siècles*, 4 vol., Paris, 1886-1917, 卷十、十一世紀の fidèles であるフランス王と同列の独立君主であるの忠誠誓約の目的消極的な関係が結ばれしことと、應知なるもの(特に III, *La renaissance de l'art, la royauté et le principat*, 1904;—t. IV, *Les nationalités régionales, leurs rapports avec la couronne de France*, 1917.)

論争の主要点に Dumas, *art. cit.*, p. 161-182. によれば、要約すれば、一般に Lot の意見が、この問題の定説であることに対し、Lemarignier の諸案は、これを若干の變説を提し、(Lemarignier, *Recherches sur l'hommage en marche et les frontières féodales*, Lille, 1945, p. 79-84; id., *Les fidèles du roi de France* (936-987), extrait du *Recueil de travaux offert à M. Clouis Brunel*, Paris, 1955, p. 138-162; id., *Le gouvernement*, p. 32-35.)

- (6) Lot, *op. cit.*, p. 241-248; Dumas, *art. cit.*, p. 191-192, 197-198, 205-208 et *passim*.  
(7) 上述の Ganshof, *Qu'est-ce que la féodalité*, p. 11 et *suiv.*, 94 et *suiv.* の定義による。  
(8) これら両書簡は、何れも Fulbert の秘書 Sigon が

- André de Micy の編纂やせた書簡集 (Bibliothèque Nationale, ms. lat. 14167.) の複製やせたもの、その手写本は Dom Bouquet, *Recueil des Historiens des Gaules et de la France* (H. F.), t. X; Migne, *Patrologia Latina* (P. L.), t. CXL. が、多くの増減や追加などがラタヌトや世に上つた。Guillaume V 宛のものは H. F. t. X, 463; P. L. t. CXL, col. 229-230, n° 58. フルベールは Ganshof, *Qu'est-ce que la féodalité?* p. 111-113; R. Boutruche, *Seigneurie et féodalité, le premier âge des liens d'homme à homme*, Paris, 1959, p. 369-371, *Documents*, n° 54. この何れも翻訳のきり取録された。
- 尚邦訳に『世良晃志郎氏のものがあつた』『封建社会の国家権力』、法と国家権力、一、一九五五年。六四頁註(六)』。
- (33) Eudes II の Robert II 宛の書簡は H. F., X, 501, Migne, P. L., t. CLXI, col. 245, n° 93 (= Roberti regis Francorum epistola, n° 5, col. 938-940) の他に、Brussel の柱田やハルベールの Brussel, *Nouvel examen de l'usage général des fiefs en France pendant le XI<sup>e</sup>, le XII<sup>e</sup>, le XIII<sup>e</sup> et le XIV<sup>e</sup> siècles, pour servir à l'intelligence des plus anciens titres du domaine de la couronne*, 2 vol., Paris, 1727, t. I, p. 337-339. が全文を採録した。更に L. Halphen, *La lettre d'Eudes II de Blois au roi Robert*, dans *A travers l'histoire du moyen âge*, Paris, 1950, p. 241-250; extrait de la R. H., t. 97 (1908), p. 287-296. 及びその手写本と校合して、ラタヌト (p. 242) の翻訳 (p. 249) を出した。部分訳にして、その都度、及びその前本稿のラタヌトやハルベール、前者は Ganshof や後者は Halphen やハルベール、Migne, P. L. を参照する。
- (34) Eudes II の書簡は Fulbert の手記やハルベール、Brussel, *op. cit.*, I, p. 72, note a. が推定した。前註に引かれたように、両書簡は何れも同一書簡集に属してゐる。Fulbert にあつた最も身近な存在であつた管の Sigon が編纂させたこの書簡集には、「Fulbert 宛の多くの書簡や、他人の幾つかの書簡」(A. Molinier, *Les sources de l'histoire de France, des origines aux guerres d'Italie* (1494), t. II, Paris, 1902, p. 13-14, n° 987.) が含まれてゐる。Sigon の編纂方針の杜撰に帰するものは、その所を得なご。スタイルその他から、ハルベールは Fulbert の手記であつたと考へるべきである (Halphen, *art. cit.*, p. 242, n. 1.)。特に根柢に流れる思想の共通性は、ただちに明らかになる。

(9) 「誓れたかきアキテーヌ侯 Guillaume へ、司教 Fulbert、祈の助けを〔贈る〕。

忠誠義務 (fidelitas) の内容 (forma) につき、何かを書くように勧められたるにより、余は諸書の權威により、〔以下に〕続くことどもを、短かく書き留めた。その主君 (dominus) に忠誠義務を誓うものは、次の六〔語〕を常に記憶に留めねばならぬ。〔即ち〕健 (incolume) 安 (tutum) 誠 (honestum) 益 (utile) 易 (facile) 及び能 (possible) 〔である〕。健 (incolume) 即ち主君に、彼の身体につき、何らの害をも及ぼさぬこと。安 (tutum) 彼の秘密につき、<sup>(a)</sup>或は、それらによつて彼が安全であり得る防壁 (munitiones) につき、彼に害を及ぼさぬこと。誠 (honestum) 彼の裁判権 (iustitia) につき、或は、彼の権限 (honestas) に属すると認められる他の諸件 (causae) につき、彼に害を及ぼさぬこと。益 (utile) 彼の諸所有 (possessions) につき、彼に害を及ぼさぬこと。易 (facile) 或は能 (possible) 彼の主君が容易になし得たる良きことを、彼に困難となさぬこと。或は可能なりしことを、彼に不可能となさぬこと。しかして忠誠〔を誓いし〕者 (fidelis) が、これらの有害事を〔なさざるように〕用心するのは正しい。しかしこれによつては、その封 (casamentum) には備いしない。何となれば、良きことがなされざる限り、悪を避けるのみでは充分でないからである。従つて若し、封 (beneficium) にふさわしきものと認められ、且誓いたる忠誠義務にかならうことを欲せば、上に記したこれらの六〔件〕に加えて、助言と助力 (consilium et auxilium) とを、その主君に忠実に捧げることが肝要である。主君はさらに、これらすべてにおいて、彼の忠誠〔を誓いし〕者に報いねばならぬ。若し〔これを〕なさざりしものは、正しく悪意〔あるもの〕と非難されるであらう。これあたかも、行為においてであれ、同意においてであれ、万一これらの義務不履行 (prevaricatio) によつてとりおなえられたるものが、不信 (perfidus) 及び誓約違反 (perjurus) 〔をおかしたると〕同様である。他の多くのこととともに、都市と、最近おそるべき火災によつて

まったく焼失せる。我らの教会堂の復興に忙殺されてあらざれば、汝により多くを書いたことであろう。この損害により、しばし動ぜざるを得ざるも、神と汝との慰めの希望により、氣をとりなおしている。」

この書簡が Guillaume V の何らかの要請によつて書かれたこと、更にその時期がシャルトル教会堂の火災の年である一〇二〇年<sup>(14)</sup>であることは、書簡そのものから明らかである。更にその本文の内容が消極的な non facere の規定と、積極的な facere の規定とに分けられていることも指摘されて来た。<sup>(15)</sup>

この文面が「諸書の権威」によつて書かれたことも、書簡そのものが謳っている。その「諸書」については文面前半に列挙された六語のうち三語 (honestum, utile, possibile) までは Isidore de Seville の *Ety mologicæ* に見出され、Isidore のこの書による、初期スコラ学的な explicatio を形成している。それらのうち「utile」と「honestum」とは、Fulbert の他の Guillaume V 宛の書簡に見られるのみならず、《Incolumnen》と《tutus》とは、彼の弟子 Hildegare の書簡に見られるから、<sup>(17)</sup>この部分は、比較的耳をわりのよい標語をならべて、教育的な効果を高めようとする、当時の一般的な方法になつたものと考えられる。<sup>(18)</sup>

又 Fulbert は Capitularia にも通曉していたと思われるから、<sup>(16)</sup>八〇二年のそれをはじめとする、一連のカロリング諸王に対する fideles の忠誠誓約が、下敷として利用されていたであろう。八〇二年の忠誠誓約は、同年の Capitulare missorum generale, c. 2. の、従来王に忠誠を誓つていたものに、あらためて皇帝 (caesar, imperator) に対して「敵ヲ王国内ニ導キ入レヌコト、又何ヲノ infidelias ニモ同意シ、或ハ〔ソレヲ〕秘匿セヌ」ことを誓わせようとの決定に基づいて、<sup>(17)</sup>各地に missi を派してとりつけたものであり、「homo が dominus ニ対シテ」そうであるように、「詐意ト悪意ナク、誠心モツテ皇帝ノ fidelis タラン」ことを、「ソノ場ニアル聖遺物 (sancta patrocina)」にかけて誓うものであった。<sup>(18)</sup>その後大きな変化をこうむらずに使用され続けたこの formule の本質は、一貫して消極的なものである。従つて Fulbert は、

カロリング朝の王又は皇帝に対する *fidelitas* の本質を、*explicatio* の形式で、忠実につたえたことになる。

註(10) Glorioso duci Aquitanorum GUILLIELMO.

FILBERTUS episcopus orationis suffragium.

De forma fidelitatis aliquid scribere monitus, haec vobis quae sequuntur breviter ex librorum auctoritate notavi. Qui domino suo fidelitatem iurat, ista sex in memoria semper habere debet: incolume, tutum, honestum, utile, facile, possibile. Incolume, videlicet ne sit domino in damnum de corpore suo. Tutum, ne sit ei in damnum de secreto suo, vel de munitionibus per quas tutus esse potest. Honestum, ne sit ei in damnum de sua iustitia, vel de aliis causis, quae ad honestatem eius pertinere videntur. Utile, ne sit ei in damnum de suis possessionibus. Facile vel possibile, ne id bonum, quod dominus suus leviter facere poterat, faciat ei difficile; neve id quod possibile erat, reddat ei impossibile. Ut autem fidelis haec nomenclata caveat, justum est; sed non ideo casamentum meretur; non enim sufficit abstinere a malo, nisi fiat quod bonum est. Restat ergo ut in eisdem sex supradictis consilium et auxilium domino suo fideliter praestet, si beneficio dignus videri velit, et salvus esse de

*fidelitate* quam iuravit. Dominus quoque *fidei* suo in his omnibus vicem reddere debet. Quo si non fecerit, merito censebitur *malefidus*: sicut ille, si in eorum *praevaricatione* vel *faciendo* vel *consentiendo* *deprehensus* fuerit, *perfidus* et *perjurus*. *Scriptissem* vobis *latus*, si *occupatus* non *essem* cum aliis multis, *tum* etiam *restauratione* civitatis et *Ecclesiae* nostrae quae *tota* nuper *horrendo* incendio *conflagravit*. Quo *damno* etsi *aliquantisper* non *moveri* non *possumus*, *spe* tamen *divini* aque *vestri* solatii *respiramus*.  
(註註②)°

(②) ノルマン人の Ganshof, Bourtuche によれば  
《sain et sauf》, 《sur》, 《honnête》, 《utile》, 《facile》,  
《possible》° Flach, *op. cit.*, t. II, *Les origines  
communales, la féodalité et la chevalerie*, Paris, 1893,  
p. 518. ノルマン人の 《salut》, 《sécurité》, 《prérogative》  
《intérêt》 《facilité》, 《liberté d'action》°

(①) 《tutus》を法語《securitas》の法語・語源として用いた事は、面々を知らぬ(不知)のBourtuche, *op. cit.*, p. 200, n. 39)° ノルマン人の Flach (*op.*



- cit.*, t. II, p. 518, 519 et n. 1.) 司教が「秘密の  
 手紙を」司教に送る「秘密の書簡」特に司庫の  
 秘書室 (secretarium) に送るべきであることが  
 明らかにされている。
- (11) 司教「聖母の夜(九月十七・八日)」の  
 Cf. Migne, *P. L.*, t. CXXI, col. 229, n. 36.
- (12) A. Luchaire, *Histoire des institutions monarchiques  
 de la France sous les premiers Capétiens* (987-1180),  
 2 vol., 2<sup>e</sup> éd., Paris, 1891, t. II, p. 42; Flach, *op.  
 cit.*, t. II, p. 518-519; Aug. Dumas, *Encore la  
 question «Fidèles ou Vassaux?» A propos du IV<sup>e</sup> vol.  
 des Origines de l'ancienne France de M. Flach*, N.  
 R. H. D., 1920, p. 186, n. 2; H. Mitteis, *Lehrrecht  
 und Staatsgewalt, Untersuchungen zur mittelalter-  
 lichen Verfassungsgeschichte*, Weimar, 1933, S.  
 312-314; Ganshof, *Qu'est-ce que la féodalité?* p. 113  
 et suiv.; G.-F. Lemaignier, *Les institutions ecclési-  
 astiques en France de la fin du X<sup>e</sup> au milieu du  
 XII<sup>e</sup> siècle*, Lot-Fawtier, *Histoire des institutions  
 françaises au moyen âge*, t. III, *Institutions ecclésias-  
 tiques*, Paris 1962, p. 51; F. Behrends, *Kingship  
 and Feudalism according to Fulbert of Chartres,  
 Mediaeval Studies*, XXV, 1963, p. 96-97.
- (13) S. Isidori Hispalensis episcopi *Etymologiarum libri  
 XX*, Migne, *P. L.*, t. LXXXII, col. 125, lib. II,  
 cap. IV, 4: Suasoria autem in tribus locis dividitur:  
*honesto, utile et possibili*. Haec differt aliquid  
 deliberativa interdum et apud se agit. In suasoria  
 autem duae sunt quae plus valent: spes et metus. Cf.  
 Mitteis, a. a. O., S. 312, Ann. 152; Behrends,  
*art. cit.*, p. 96, n. 16.
- (14) Ep. 71 (a<sup>o</sup>1021), Migne, *P. L.*, t. CXXI, col. 236:  
 Clarissimo duci Aquitanorum GUILLELMO  
 FULLBERTUS episcopus, *utile et honestum*; id., Ep.  
 136, col. 271: ... quantum ejus gratiam inieris,  
 qui te demulceant, qui rordant, quam *inclinumis  
 tute consistis*.
- (15) Behrends, *art. cit.*, p. 97 and n. 19.
- (16) Mitteis, a. a. O., S. 313, Ann. 153.
- (17) Borenius, *Capitularia regum Francorum*, M. G. LL.,  
*Cap.*, t. I, Hannover, 1883, p. 92, n<sup>o</sup> 33, *Capitulare  
 missorum generale* (802 initio), c. 2: De fidelitate  
 proritencia dcrno imperatori. Precepit que, ut omni  
 homo in toto regno suo, sive ecclesiasticus sive  
 laicus, unusquisque secundum votum et propositum  
 suum, qui antea fidelitate sibi regis nomine pro-

mississent, nunc ipsum promissum nominis caesaris  
facti; et hii qui adhuc ipsum promissum non  
perfecerunt omnes usque ad duodecimo aetatis annum  
similiter facerent. Et ut omnes traderetur publice,  
qualiter unusquisque intellegere posset, quam magna  
in isto sacramento et quam multa comprehensa sunt,  
non, ut multi usque nunc extimaverunt, tantum  
fidelitate domno imperatori usque in vita ipsius, et  
ne aliquem inimicum in suum regnum causa  
inimicitiae inducat, et ne alicui infidelitate illius  
consentiant aut retaciat, sed ut sciant omnes istam in  
se rationem hoc sacramentum habere.

(20) *Ibidem*, p. 101-102, n° 34, *Capitularia missorum  
specialia* (802 initio): Sacramentale qualiter repronitto  
ego, quod ad isto die inantea fidelis sum domno  
Karolo piissimo imperatori, filio Pippini regis et  
Berthane reginae, pura mente absque fraude et  
malo ingenio de mea parte ad suam partem et ad  
honorem regni sui, sicut per dicitum debet esse  
homo domino suo. Si me adiuvet Deus et ista  
sanctorum patrocinia quae in hoc loco sunt, quia  
diebus vitae meae per meam voluntatem, in quantum  
mihi Deus intellectum dederit, sic attendam et

consentiam.

Item aliud. Sacramentale qualiter repronitto ego:  
domno Karolo piissimo imperatori, filio Pippini regis  
et Berthane, fidelis sum, sicut homo per dicitum  
debet esse domino suo, ad suum regnum et ad suum  
rectum habeo custodiam et custodire volo, in quantum  
ego scio et intellego, ab isto die inantea, si me  
adiuuet Deus, qui coelum et terram creavit, et ista  
sanctorum patrocinia.

聖ノキトハ〇ハシ | capitularia 12574 F.-L.  
Ganshof, *Recherches sur les capitulaires*, Paris, 1958,  
p. 50-52 p. 198 et *passim*.

(21) Lot, *Fidèles ou vassaux* ? p. 241 et suiv.

(22) Ganshof, *Qu'est-ce que la féodalité* ? p. 54, etc.

II

Fulbert は書簡の中段で、封 (casamentum, beneficium) にふさわしくある条件として、「助言と助力」(consilium et auxilium) を捧げる必要をのべた。その他の変更とともに「consilium et auxilium」をとり入れた忠誠誓約の最初ものは、八五八年三月二十一日に Quierzy-sur-Oise で Charles le Chauve に捧げられたそれである。<sup>(21)</sup> この Formule は云う。<sup>(22)</sup>

「我が知り且ナシ得ル限り、神ノ援ケニヨリ、何ヲノ詐意モ叛意モナク、我が職務 (ministerium) ニ応ジテ、又我が身 (persona) ニ応ジテ、助言ト助力トニヨリ (consilio et auxilio) 汝ノ忠誠ナル助力者 (fidelis adiutor) タラン。神ガ王ノ名ト王国トニヨツテ、汝ニ賦与シタマイシカノ権力ヲ、神ノ意ニソウテ、汝ト汝ノ fideles トノ救済ノタメニ、フサワシキ名譽ト力トラモツテ、汝ガ保チ且治メ得ンガタメニ……」。

この後の王に対する忠誠誓約の原型となるべきこの Formule を、Fulbert が直接に利用したとは考えられない。何となれば彼の書簡には、八五八年の formule を特徴づけている「我が職務 (ministerium) ニ応ジテ、又我が身 (persona) ニ応ジテ」という一句が入っていないからである。又文脈全体としても、Fulbert のそれが消極的な忠誠誓約と対照させて、「封にふさわしく」あるための条件として「consilium et auxilium」をあげているのに対して、八五八年の誓約文は、八〇二年のそれに「consilium et auxilium」を組み込んで、後者を中心に、又典型的な theocratic 理念を基礎として文意を展開しているのである。

同じ言葉を Fulbert と同様なニュアンスで用いた例は、彼が私淑していた<sup>(23)</sup> Abbon de Fleury (988-1004) の *Collectio canonum* に見出される。その c. IV. *De fidelitate regis* の冒頭に次の一節がある。<sup>(24)</sup>

「王ノ職務 (ministerium) ガ、全王国ノ諸問題ヲコトゴトク扱カウモノデアルトスレバ、……司教タチヤ王国ノ有

力者たち (primores regni) ノ承認ガナケレバ、如何ニシテソレラ (ノ諸問題) ニ耐エ得ヨウカ。…：コノ故ニ、若シ彼 (王) ニ、アラユル尊敬ヲモツテ、助言ト助力トニヨリ、然ルベキ名譽ヲ捧ゲナイナラバ、彼ノ職務ノ行使ハ、義務不履行ノ不信 (contumacium perfidia) ノウチニナサレデアロウ。何トナレバ、王独リ (ニテ) ハ、王国ノスベテノ用 (utilia) ヲ充タサザレバ。……」

Abbon de Fleury は「王ノ職務トハ何カ」(Quale ministerium regis sit) を問うにあたつて、八二九年の第六回バリ公会議第二卷第二章の canon の引用をもつて答えた。<sup>(27)</sup> この canon は、Jonas d'Orléans (av. 780-842/843) の *De institutione regia* (831) の第四章「王個有ノ職務トハ何カ」(Quid sit proprie ministerium regis) と完全に一致するところから、同じく Jonas d'Orléans の手になるものと考えられているが、<sup>(28)</sup> その書き出しは次の通りである。

「王ノ職務トハ、特ニ、神ノ民ヲ統べ、且平衡ト正義トヲモツテ導キ (regere)、又平和ト協和トヲ保ツヨウニ努メルニアル。何トナレバ彼ハ、先ズ神ノ教会ト (神ニ) 仕エルモノトノ保護者デアラハバナラヌカラ。…」<sup>(29)</sup>

この表現は、その前章の王の定義「王ハ正シク導クコトカラ (カク) 呼バレン」(Rex a recte regendo vocatur) と云う表現や、《rex》と《tyrannus》の區別が Isidore de Séville の *Etymologiae* によつてゐると同様だ、同じく Isidore の *Sententiae* によつてゐる。<sup>(30)</sup> 即ち Fulbert はこの部分でも、Abbon や Jonas と同じ源、即ち Isidore de Séville から、jurisprudences を——おそろしく Abbon を媒介として——引出してゐるのである。

Jonas と Abbon の theocratic な王観は、カロリング朝の忠誠誓約とも共通してゐる。王は fidelis であることと、神に fidelis であることとの等置は、<sup>(31)</sup> 正にこの基盤から生じた。Abbon の段階で、この本来的な fidelitas のみでは、王国を支えるには不充分と考えられるにいたり、かくて 《consilium et auxilium》という積極的な義務が、あえて附加されたのである。Fulbert が採用した jurisprudence は、<sup>(32)</sup> かくこの Abbon のそれであると考えねばならぬ。

- (12) Ganshof, *Recherches*, p. 35-36; Boutruche, *op. cit.*, p. 201; A. Dumas, *Le serment de fidélité et la conception du pouvoir du 1<sup>er</sup> au IX<sup>e</sup> siècle*, R. H. D., 1931, p. 313-314. 註(23)に掲げられた本文の *et* 《et auxilio》を同文になった結果、《consilio et auxilio》の初出が八二六年の Pontion への誓約 (Boreitus-Krause, *Cap.* II, p. 100, n° 220.) ではないこと (p. 316-318.)。Ganshof, *Qu'est-ce que la féodalité ?* p. 81. 註(1)及び八五九年の *Libellus proclamationis adversus Wrenionem*, c. 9. (Boreitus-Krause, *Cap.* II, p. 452.) の *et* の *et* が、前掲の被出文の *Recherches* の結果を無視した理由は明らかでない。
- (23) Boreitus-Krause, *Cap.* II, p. 296, n° 269, *Sacramenta Carisiacum praestitia* (858. mart. 21): *Sacramentum fidelium*.  
Quantum sciero et potero, Domino adjuvante absque ulla dolositate aut seductione et consilio et auxilio secundum meum ministerium et secundum meam personam fidelis vobis adiutor ero, ut illam potestatem, quam in regio nomine et regno vobis Deus concessit, ad ipsius voluntatem et ad vestram ac fidelium vestrorum salvationem cum debito et honore et vigore tenere et gubernare possitis; et pro ullo homine non me inde retraham, quantum Deus
- mhi intellectum et possibilitatem donaverit.*
- 譯記(24) Dumas, *Le serment*, p. 313-314; Boutruche, *op. cit.*, p. 368, *Document*, n° 53. 以下 *et* と *et* の *et* による。又この誓約には王の誓約が統一、相互に文書として交換された (Voir. *Recueil des actes de Charles II le Chauve, roi de France*, éd. G. Tessier, t. I, Paris, 1943, p. 509-510, n° 198.)
- (25) Dumas, *Le serment*, p. 314 et suiv. 近 Lot, *Fidèles ou Vassaux ?* p. 244. 註(1)の誓約が「特別な環境から」生じたものであることは、考察の対象からはずされた。しかし早見によれば、《consilium et auxilium》を挿入せしめた原因は、叛乱の最中に王の側に残った少数者にたいして誓われた *et* の *et* の環境の特異性である。この時期の Charles le Chauve の絶望的な立場は、この *et* 差をたゞ L. Halphen, *Charlemagne et l'empire carolingien*, Paris, 1947, p. 352-359.
- (24) Dumas, *Le serment*, p. 314. 註(1)に *fidelitas* の変質を認めた。即ちこれは「司教は司教として、伯は伯として」主君仕えの *et* の *et* による。従来のように、無限定且平等な服従とは、むしろ *et* の *et* の *et* である。しかし文面より、この一語は《consilium et auxilium》の質量を規定して居る *fidelitas* 全体を制約して *et* の *et* による。
- (25) Fulbert の Abbon 宛の書簡 (Ep. 2 (olim 21), Migne,

P. L., t. CXLII, col. 190-191, anno 1003.) 史料  
上のこの条を讀むべき。 Cf. *Histoire littéraire de  
la France*, t. VII, p. 261, reprod. dans Migne, P. L.,  
t. CXLII, col. 174.

- (9) Abbonis Floriacensis *Collectio canonum*, IV, *De  
fidelitate regis*, Migne, P. L., t. CXXXIX, col.  
487 : Cum regis ministerium sit totius regni penitus  
negotia discutere, ne quid in eis lateat injustitiae,  
quomodo ad tanta poterit subsistere, nisi annuentibus  
episcopis et primoribus regni ? Et cum Apostolus  
dicat... , qua ratione sui ministerii vices exercebit in  
*contumaciam perficia*, si ei primores regni auxilio et  
consilio non exhibeant debitum honorem cum omni  
reverentia? Ipse enim solus non sufficit ad omnia  
regni utilia....

- (10) *Ibidem*, col. 477, III, *De ministerio regis* : Quale  
ministerium regis sit... Unde ex libris, qui ex  
concliliis sui [i. e. Caroli et filii ejus Ludovici] temporis  
effecti sunt cum subiectione episcoporum, quanta  
facile est reperiri, expressum libro II, cap. 1  
(*Concil. Paris. VI*), post aliqua : ...

- (11) Mansi, *Sacrorum conciliorum nova et amplissima  
collectio*, t. 14, col. 577—578, Concilium Parisiensis  
VI (a<sup>o</sup> 829), L. II, cap. 2.

- (12) J. Reviron, *Les idées politico-religieuses d'un évêque  
du IX<sup>e</sup> siècle, Jonas d'Orléans et son "De Institutione  
Regia", L'Église au Moyen Age*, I, Paris, 1930, p.  
31-32, 48.

- (13) *De institutione regia*, cap. IV, Regale ministerium  
specialiter est populum Dei gubernare et regere cum  
equitate et iustitia, et ut pacem et concordiam habeant  
studere. Ipse enim debet primo defensor esse  
ecclesiarum et servorum Dei. ... (Texte: Reviron,  
*op. cit.*, p. 145.)

- (14) *Ibidem*, cap. III, *Quid sit rex, quid esse, quidque  
debeat cavere* : (Reviron, *op. cit.*, p. 138-139).

- (15) Isidori Hispalensis episcopi *Etyimologiae*, lib. I, c.  
XXXIX, 3, lib. II, c. XXXIX, 7; lib. IX, c. III, 1  
(Migne, P. L., t. LXXXII col. 105, 149, 341).  
Isidori Hispalensis episcopi *Sententiae*, lib. III, c.  
XLVII, 7 (Migne, P. L., t. LXXXIII, col. 719).  
Cf. Reviron, *op. cit.*, p. 72-73.

- (16) H. Helbig, *Fidèles Dei et regis, Zur Bedeutungs-  
entwicklung von Glaube und Träne im hohen Mittelalter*,  
*Archiv f. v Kulturgeschichte*, XXXIII, 3, 1951, SS.  
275-306, besond. 287-291.

### III

Fulbert は書簡の後段において、まず主君が忠誠誓約者と全く同じ義務をおうことを規定した。この双務性(*reciprocite*)は封建的契約の特性として、諸家の注目するところであるが、その出典は明らかにされていない。<sup>(34)</sup> *Capitularia* は senior が「殺ソウトシ、或ハ棒デ打トウトシ、或ハ妻又ハ娘ヲ犯ソウトシ、或ハソノ世襲財産ヲウバオウトシタ場合」等に、その senior を捨てることを認めているが、<sup>(35)</sup> Fulbert の「悪意あるものと非難されるであろう」と云う表現は、*jurisprudence* として熟したものと考えられぬ。

それに対して、「行為においてであれ、同意においてであれ」「義務不履行」(*praevaricatio*)の責任を問われた忠誠誓約者に対して規定されている罪、*perfidus* と *perjurus* については、ある程度その出所を追究し得るようと思われる。まず *perfidus* について、Abbon de Fleury が *primores regni* が「助力ト助言トニヨリ (*auxilio et consilio*)…然ルベキ名譽ヲ捧ゲナイ」場合を「義務不履行ノ不信」(*contumacium perfidia*)と規定したことは前に述べた。更に遡れば、六九三年の第十六回トレド公会議決定末尾に、*praevaricatio* と *perfidare* を同時に用いた文章がある。<sup>(36)</sup> Fulbert はおそらく、基本的には Abbon によりつつ、トレド公会議決定をも参照して、この文章を綴ったのではないだろうか。然りとすれば、*perfidus* は、「助力ト助言」の義務を欠いたものを指すことになる。*perjurus* については、聖物 (*res sacra*) に右手をおいて誓われる誓約を、原則的には禁止しつつ、その違反を厳しく罰する *jurisprudence* は、カロリング立法と教会法とに一貫して発展したものであった。<sup>(37)</sup> Fulbert 書簡の前段においてはむしろ消極的に見える *fideltas* は、これがカロリング朝の忠誠誓約を下敷きにしてしている限り、聖遺物に右手をおいて誓われる。<sup>(38)</sup> 従ってその違反者は *perjurus* である。

以上の考察は一応 Fulbert の *theorie* を *fideltas* 違反に対する *perjuria* と *consilium et auxilium* の不履行、即ち

「casamentum (又は beneficium) にあそわしくない」行為に対する perfidia とに分けることを許すように思われる。しかし問題は、前にあげた Abbon de Fleury の *Collectio concunum*, c. IV, *De institutione regia.* を Fulbert が何処まで利用しているかと云うことである。Abbon はこの章の中で、王と司教と修道院長との選挙の等質性を論じ、「サラニ王が任命サレルト、彼ハ、ソノ王国ノ境界内デ何ラノ不和モ起ラナイヨウニ、スベテ従ウモノカラ、誓約ニヨッテ信ヲ強請スル」(ab omnibus subditis fidem sibi sacramento exigit) と述べた後に、六三三年の第四回トレド公会議の決議<sup>カシ</sup>七五の前半を引用して結論に代えている。<sup>(39)</sup> そしてその決議では、誓約 (sacramentum, juramentum) 信 (fides) 約束 (promissio, professio) 誓約違反 (perjuria) 不信 (perfidia) 等のタームが、必ずしも九世紀以降のそれらのような厳密さで使用されているとは考えられないし、又「モシ王タチニ属スル人タニヨッテ、約サレタ信ガ犯サレルナラバ、ソレハ正シク瀆神 (sacrilegium) デアル。何トナレバソレハ単ニ彼ラ (王タチ) ニトッテ契約破棄 (pacti transgressio) デアルノミナラズ、ソノ名ニオイテソノ約束ガ結バレタ神ソノモノニトッテモソウデアルカラ。」<sup>(40)</sup> と結んでいるところから、「聖物」という materia が介在するか否かに「誓約」と「約束」との区別をおく jurisprudence とは異質であるからである。

それにより以上の異質性が Abbon 及び彼が利用した公会議決議と、Fulbert の書簡との間に認められねばならない。Guillaume V が如何なる問をなしたのかは明らかでないにせよ、Capitularia や Jonas d'Orleans や Abbon が共通して fidelias を受け得る存在を王又は皇帝に限定していたのに対して、Fulbert の書簡はこれを dominus とのみ規定した。彼はその用語に関する限り、その殆んどを教会法源によつたらしいが、その explicatio はこれを現実と対応させたのである。



(35) 德大士 Flach, *op. cit.*, II, p. 519; M. Bloch, *La sociéti féodale, la formation des liens de dépendance*, Paris, 1949, p. 350; Boutruche, *op. cit.*, p. 203; Ganshof, *Qu'est-ce que la féodalité?* p. 125; Behrends, *art. cit.*, p. 99.

(36) Boretius, *Cap.*, I, p. 172, n° 77, Capitulare Aquisgranense, c. 16; Quod nullus senioreni suum dimittat postquam ab eo acciperit valente solido uni, excepto si eum vult occidere aut eum baculo caedere vel uxorem aut filiam maculare seu hereditatem ei tollere. (林 capitulare 〇廿七廿' Boretius, p. 170. ヲノ年代801-813廿' Ganshof, *Recherches*, p. 10, n. 44 et *passim*. ヲノ年代802-803廿' ) Cf. Boretius, *Cap.*, I, p. 215, n°104, Capitula Francia, c. 8.

(37) Concilium Toletanum XVI, Mansi, *Sacr. concil. nova et ampl. coll.*, t. XII, col. 83: ...Quorum denique sceleratorum, qui et in praeteritis et nunc *perfrassse* detecti sunt, *praevaricatione* compellimur coetus vestri in universitatem consulare. ... 田羅拔斗 Fulbert は' Abbon 又ハトニエの一連の公会議の影響を強へんけしうのよかに思われる。後註(40)参照。

(38) 神々の professio, promissio (約束) に対すハ違反ハ' 聖物におごつたれぬの juramentum, sacramentum (誓) 案)との相違' それらにこつての教会法的 jurisprudence

の発意にこつたれ' M. David, *Le serment du sacre du IX<sup>e</sup> au XV<sup>e</sup> siècle, contribution à l'étude des limites juridiques de la souveraineté*, R. M. A. L., VI, 1950, p. 68-89; id., *La souveraineté; et les limites juridiques du pouvoir monarchique du IX<sup>e</sup> au XV<sup>e</sup> siècle*, Paris, 1954, p. 90-137. Capitularia ヲノ年代801-813廿' Boretius, *Cap.*, I, p. 49, n° 20, Capitulare Haristallense (a° 779), c. 10: De eo qui *perjurium* fecerit, nullam redemptionem, nisi manum perdat...; p. 98, n° 33, Capitulare missorum generale (a° 802 initio), c. 36: ... Et usum *perjuri* omnino non permittant, qui hoc pessimum scelus christiano populo auferre necesse est. Si quis autem post hoc in *perjurio probatus fuerit*, manum dextera se perdere sciat; p. 123, n° 44, Capitulare missorum in Theodonis villa datum secundum generale (a° 805 exeunte), c. 5: ... Et si aliquis post pacificationem alterum occiderit, componat illum et *manum quam perjuravit perdat* et insuper bannum dominicum solvat; etc. 即ち教会法によつて規定された刑(破門等)の即ハ' 聖遺物にふれた右手を失う。

(39) 誓約における「聖物」(res sacra)の介入につつたれ' David, *Le serment*, p. 89 et suiv. 又同ノ' Fulbert は' 「fidelitas」を誓へ」際に' カロリング朝のそれの如くに

「聖職物リヨル」ハリスを既記シテオナラガ、十一世紀  
 以後ノトモ fidelitas が sacramentum である。聖職者  
 ニ対シテオナラガトシテオナラガトシテオナラガトシテ  
 からる時期に作られたインベナーのタムスリーの一  
 句、*Ubi Harold sacramentum fecit Willelmo duci* 』  
 Cf. F. Stenton, etc., *La Tapisserie de Bayeux*, Paris,  
 1957, p. 168, 180 et *passim*, pl. 29.

(8) Abbonis abbatis Floriacensis *Collectio canonum*, IV,  
*De fidelitate regis*, Migne, *P. L.*, t. CXXXIX, col.  
 478: Porro ordinatus rex ab omnibus subditis fidem  
 sibi sacramento exigit, ne in aliquibus regni sui  
 finibus discordia generari possit. Hinc habes scriptum  
 in concilio Toletano IV:...

(9) Abbon, *loc. cit.*, col. 478-479; Concilium Toletanum  
 IV (a°633), c. LXXV, Mansi, *Sacr. Concil. nova*  
*et ampl. coll.*, t. X, col. 637-638; Post instituta  
 quaedam ecclesiastici ordinis vel decreta, quae ad  
 quorundam pertinent disciplinam, postremo nobis  
 cunctis sacerdotibus sententia est pro robore nostrorum  
 regum et stabilitate gentis pontificale ultimum  
 sibi Deo iudice ferre decretum. Multarum quippe  
 gentium, ut fama est, tanta exstat *perfidia* animorum,  
 ut *fidem sacramento promissam regibus suis servare*

*contemnant*, et ore simulant *juramenti professione* m,  
 dum retinent mente *perfidiae* impletatem. *Jurant*  
 regibus suis, et *fidem* quam pollicentur, *praevocant*,  
 nec metuant volumet illud iudicii Dei, per quod  
 inducitur maledictio multaue poenarum comminatio  
 super eos qui jurant in nomine Domini mendaciter.  
 Quae igitur spes talibus populis contra hostes laboranti-  
 bus erit? quod foedus non violandum? quae in hostibus  
 jurata sponsio permanebit, quando nec ipsis propriis  
 regibus *juratam fidem* conservant? quis enim adeo  
 furiosus est, qui caput suum manu propria desecet?  
 Illi, ut noctum est, immemores salutis suae, propria  
 manu se ipsos interimunt, in semetipsos suosque reges  
 proprias convertendo vires. Et cum Dominus dicat...  
 ..illis nec vitare metus est *perjurium*, nec regibus  
 suis inferre exitium. Hostibus quippe *fides pacis*  
 datur, nec violatur, id est, si bello *fides* valet,  
 quanto magis in suis servanda est? *Sacrilegium* quippe  
*est, si violetur a gentibus regum suorum promissa*  
*fides, quia non solum in eis fit pacis transgressio,*  
*sed et in Deum quidem, in cuius nomine pollicetur*  
*ipsa promissio.*

IV

Fulbert の上掲書簡の現実的裏づけとして、もっともしばしば援用されるのは、<sup>(41)</sup> 同人が一〇〇七年にパリ司教、Vendôme 伯 Renaud 宛に書いた書簡である。これは Renaud がシャルトル司教から Comté de Vendôme を casamentum としてうけた際に、Fulbert が彼に、負うべき義務を書きおくれたもので、その内容は正しく一〇二〇年の書簡の原則と対応している。<sup>(42)</sup> もっともそのうちの、Fulbert の casamentum からむしろ beneficium をうけてくる、Renaud の milites の commendatio を、彼自身がうけるという点は履行されなかつたらしい。一〇〇八年の書簡が彼らを叱責して、「次の復活祭までに我がもとに来て、汝らの servitium をなすこと」を命じ、「それをなさざる場合には、汝らを破門すべく」又「その後それら汝らが保有する casamentum を一人又は数人に与えるであらう」と云っている。<sup>(43)</sup> これら二書簡は、casamentum を受ける法行為が、Fulbert においては依然として commendatio であること、<sup>(44)</sup> 又 commendatio をはじめその他の casamentum に関する義務違反 (contumelia) に対する罰が、破門と casamentum の没収とであることを教えてくれる。

この例はさらにもう一つの例と対照される必要がある。一〇三一年の第二回リモージュ公会議第一部は、Gascoigne の milites の例を報告している。この milites は、Gascoigne 侯から死をもつておどかさされて、その命令通りに彼の直接の senior の首をはねた。それを発見した司教は云つた。「汝ハ汝ノ senior ノタメニ、彼ニ何ラカノ手ヲ下ス前ニ、死ヲウケルベキデアッタ。カクテカカル信ノタメニ、汝ハ神ノ殉教者トナッタデアロウ。シカシ汝ハ、最モ重大ナ、未聞ノ罪ヲ犯シタ。我ラハ汝ニ poenitentiae ヲナスコトヲ勸メル〔ベキヤ否ヤ〕ヲ知ラヌ。」従つて問題はローマ教皇のもとにもたらされた。<sup>(45)</sup> Fulbert の書簡においては消極的な表現をしかされていない fidelitas に対する罰は、現実には casamen-

目に関する義務不履行に対する罰に比して、少なくとも教会人の目にははるかに重く、且ほとんど純粹に教会法の対象であったのである。

*casamentum* に対する *commendatio* 不履行が、一〇〇八年の Fulbert の叱責のように、必ず破門を招くか否かには疑問がある。この書簡のこの部分は、Fulbert としては極度に感情的であるからである。<sup>(46)</sup>むしろこれは、武力行使に代わる威嚇と考えるべきであろう。現実に *casamentum* に関する義務違反は、*casamentum* を失なうことによつて償なわれる。そのことを最もよく示しているのが、一〇二三年頃の Eudes II 書簡である。<sup>(47)</sup>この、問題の多い、そしておそろくは Fulbert の手になつたと考えられる書簡の中で、Eudes II は Robert 王が彼を「beneficium にふさわしくないと判断した」ことを伝え聞いて、まずその beneficium が王の「恩寵によるとともに、相続権によつて祖先から」もたらされたものであること、次にそれに対する奉仕として、「宮廷でも、軍役でも、外征でも仕えた」こと、即ち正しく *consilium et auxilium* を果したことををのべ、「honor を失なつて生きるよりは、honor を保つて死ぬことを選ぶ」と強調した。<sup>(48)</sup>即ち事の結果として彼がおそれたことは、honor (= beneficium = casamentum) を失なうことのみであつて、それ以上の教会的罰則は念頭になかつたのである。

結論的に当時の社会は、*fidelitas* と *commendatio* による *casamentum* とを分けて考え、且それぞれの義務も區別して考へていたと云えさうである。換言すれば、一 *fidelis* が *dominus* と結びつく法的紐帯によつて、*ratio personae* と *ratio materiae* とはわかれていたのである。それらを一応一つの体系の中に、それもスコラ学的な、且カノニクな *explicatio* によつて組み込もうとしたのが、Fulbert の努力ではなかつたであらうか。それらのうちでも、*fidelitas* は、ほとんど排他的に教会法の領域に属していた。その上に、Abbon de Fleury に見られるような *theocratic* 理念が潜在する際に、教会人 Fulbert は、特に罰則面で一種の歯切れの悪さを露呈したのである。何れにせよ、一〇二〇年のこの書簡

が、複雑な dominus 対 fidelis 又は vassallus 関係の rationes に関する最初の jurisprudence であることは事実である。その後の書簡は十一世紀のうちに Gratianus の *Decretum* と *Libri Feudorum* 及び<sup>(53)</sup> 同時に収録された。しかもその後<sup>(54)</sup> vassallus の義務違反は、消極積極の両方を beneficium を失ふことによりその罪を犯したのだとある。

(54) Mitteis, a. a. O., S. 266, Anm. 266 ; Ganshof, *Quest-ce que la féodalité?* p. 114-116 ; Behrends, *art. cit.*, p. 98. 本書題が「世に『封建原理』の記述をなすものを探して W. Kienast, *Untereinander und Treuverbahalt in Frankreich und England, Studien zur vergleichenden Verfassungsgeschichte des Mittelalters*, Weimar, 1952, S. 28-29, 21-22 を参照せよ。

(55) Fulberti *Epistola*, VI, Migne, *P. L.*, t. CXXI, col. 204: Hoc a vobis exigo: securitatem de mea vita et membris, et terra quam habeo vel per vestrum consilium acquiram. De auxilio vestro contra omnes homines, salva fidelitate Roberti, de receptu Vindonici castri ad meum usum et meorum fidelium, qui vobis asscurabunt illud ; commendationem vestrorum militum, qui de nostro casamento beneficium tenent, salva fidelitate vestra ; justitiam de querimonia sanctorum et Huberti, et de querimoniis canonicorum Ecclesiae nostrae, et de legibus ariorum nostrorum. 即ち「我が生命と肢体と土地との安全 (securitas)」

「Robert 王に援助を求めよ (auxilium) Vendicme 侯の Fulbert と彼の fideles との間で」 Fulbert の casamentum から beneficium を得たことは Renaud の milites の commendatio (Renaud は彼らの指揮を執る者である) である(森谷邦子『中世の封建』)の論(=consilium)。

(56) Fulberti *Epistola*, X (a<sup>o</sup> 1008), Migne, *P. L.*, t. CXXI, col. 106 : FULBERTUS Dei gratia episcopus ... omnibus illis qui tenent casamentum sanctae Mariae Carnotensis Ecclesiae per domum Reginaldi episcopi. Voco vos et admono ex parte Dei et sanctae Mariae et nostra, ut infra proximum Pascha veniatu ad nos, aut nostrum servitium facere, aut de vestris casamentis legitimam rationem reddere. Quod si non feceritis, excommunicabo vos propter contumeliam, ... Postea vero ipsa casamenta quae tenetis aut uni aut pluribus dabo, ...  
(57) Behrends, *art. cit.*, p. 98, n. 24. 《servitium facere》と「commendare」と同義である。

(45) Concilium Lemovicense II, sessio II (a<sup>o</sup> 1031), Mansi, *Sacr. Concil. nova et ampl. coll.*, t. 19, col. 548:...

Cui ille compassus dixit: Debueras pro seniore tuo mortem suscipere, antequam illi manus aliquo modo inferres, et martyr Dei pro tali fide fieres; sed gravissimum reatum egisti, et nobis inauditum. Nescio tibi consilium ferre poenitentiae, sed vade quantocius ad papam Romanum. ...

(46) 前註(43)。「...汝の被<sup>レ</sup>許<sup>ス</sup>べ<sup>ク</sup>、且聖務を重<sup>ク</sup>問<sup>ハ</sup>サ<sup>レ</sup>トシ<sup>テ</sup>、牛<sup>ノ</sup>者<sup>ノ</sup>交<sup>リ</sup>を<sup>モ</sup>、死者<sup>ノ</sup>葬<sup>リ</sup>を<sup>モ</sup>、及<sup>キ</sup>、汝<sup>ノ</sup>ト<sup>シ</sup>ト<sup>シ</sup>、禁止<sup>ス</sup>ベ<sup>ク</sup>。更<sup>ニ</sup>、Vend<sup>i</sup> me の城<sup>ト</sup>、その領<sup>域</sup>ト<sup>シ</sup>、その<sup>レ</sup>は聖務<sup>ガ</sup>祝<sup>ワ</sup>れ<sup>サ</sup>、死者<sup>ガ</sup>葬<sup>ら</sup>れ<sup>ル</sup>ベ<sup>ク</sup>、呪詛<sup>ヲ</sup>、及<sup>キ</sup>、汝<sup>ノ</sup>ト<sup>シ</sup>ト<sup>シ</sup>。』《...excommunicabo vos. ... et interdiciam ut non audiat<sup>s</sup> divinum officium, nec vivi recipiat<sup>s</sup> communionem, neque mortui sepulturam. Quin etiam castellum Vindocinum et territorium eius anathematizabo, ut in eis divinum officium non celebratur, neque mortuus sepeliatur...》

(47) 上の書簡に「...」前註(43)。

(48) 前註(46)。

(49) 便宜上、その全文を省く。

Domino suo regi Roberto comes Odo. Pauca tibi, domine, dicere volo, si audire digneris. Comes Richardus, tuus fidelis, monuit me venire ad justitiam aut ad concordiam de querelis quas habebas contra

me. Ego vero nisi causam hanc totam in manu ipsius. Tum ille, ex consensu tuo, constituit mihi placitum ubi hoc perfici posset. Sed, instante termino, cum ad hoc peragendum paratus essem, mandavit mihi ne me fatigarem ad conditum placitum veniendo quia non erat tibi cordi aliam justificationem seu concordiam recipere, nisi hoc tantum ut faceres mihi defendere quod non essem dignus tuum beneficium tenere de te nec sibi competere dicebat ut me ad tale iudicium exhiberet sine conventu parium suorum. Haec causa est cur tibi ad placitum non occurreris. Sed de te, domine mi, valde miror, qui me tam prepro-pere, causa indiscussa, tuo beneficio iudicabas indignum. Nam, si respiciatur ad conditionem generis, claret Dei gratia quoad hereditabilis sim; si ad qualitatem beneficii quod mihi dedisti, constat quia non est de tuo fisco, sed de his que mihi per tuam gratiam ex maioribus meis hereditario jure contingunt; si ad servitii meritum, ipse profecto nosti, donec tuam gratiam habui, quomodo tibi servierim tui avertisti a me et honorem quem dederas mihi tollere nisus es, si me et honorem meum defendendo aliqua tibi ingrata commisi, feci hoc laceratus injuriis et necessitate coactus. Quomodo enim dimittere possam

ut non defendam honorem meum? *Deum et animam meam testor quod magis eligerem honoratus mori quam dishonoratus vivere.* At, si me dishonorare velle desistas, nichil in mundo est quod magis quam gratiam tuam vel habere vel promereri desiderem. Discordia enim tua mihi quidem molestissima est, sed tibi, mi domine, tollet officii tui radicem et fructum, iustitiam loquor et pacem. Unde suppliciter exoro clementiam illam, que tibi naturaliter adest si maligno consilio non tollatur, ut jam tandem a persecutione mea desistas meque tibi sive per domesticos tuos seu per manus principum reconciliari permittas. [Yale.]

結

Guillaume V が Fulbert の fidelitas の内容を記した背景として、Garaud は Hugues IV de Lusignan 等の châtelaïns 層の抬頭を指摘した<sup>(52)</sup>。こうした新しい社会層の出現は、たしかにそれまでの慣行の再考をうながし、又王の相対的な弱化は、従来の王と primores regni との法関係や、princes territoriaux と châtelaïns との法関係にスライドさせたであろうし<sup>(53)</sup>、しかもそれらが、十一世紀前半のフランスにおける一般的傾向であったことを、我々は疑わない。

しかし以上の考察の結果、《Fidèles ou Vassaux?》論争について、いわゆる「伝統的学説」が依拠している論点の幾つかに、我々は疑いをもちざるを得ない。即ち一は、《Fidélité》こそが、この法関係を結ぶ本質的な法的要素であり、commentatio とは、homagium とは、むしろ副次的要素であるとやる点<sup>(54)</sup>、一は、homage personnel

本書簡のその背景として、Halphen の論文「拙(55)」が最終的結論であるが、回世の Ch. Pfister, *Études sur le règne de Robert le Pieux* (996-1031), Paris, 1885, p. 233-242. 参照せよ。

(52) *Decretum Gratiani*, C. 22, qu. 5, c. 18 (Friedberg, *Corpus iuris canonici*, I, col. 887-888) [1140年頃]; *Libri Feudorum*, II, 6 (K. Lehmann, *Das langobardische Lehnrecht*, Göttingen, 1896, S. 120-121.) [1137年頃]

(53) F., II, 24, *Quae fuerit prima causa beneficii amittendi* (Lehmann, a. a. O., S. 144-148).

こそが本来的なものであり、封を結びつく *hommage réel* は、むしろ後から生じたものであると見る点である。<sup>(註)</sup> これはカロリンガ朝の *fidèles* から十一・十二世紀の *vassaux* への継続を説明するに極めて便利なものではあるが、我々の考察は *fideltas* は法関係の *ratio personae* を *commendatio* はその *ratio materiae* を負いつたを明らかとした。これらの *rationes* は、一〇一〇年には併存してゐたのである。従つて今後の問題は、何故に一〇三〇年前後、*ratio materiae* をになう *commendatio* が *homagium* にいつて代られたのか、その変化の意味するものは何かを明らかにする必要があるであらう。

- (註 52) M. Garaud, *Un problème d'histoire : à propos d'une lettre de Fulbert de Chartres à Guillaume le Grand, comte de Poitou et duc d'Aquitaine*, dans *Études d'histoire du droit canonique d'ici et là à Gabriel Le Bras*, t. I, Paris, 1965, p. 559-562. 注 Boutruche, *op. cit.*, p. 202-203. は、この書簡の標題 *milites* 等の拾頭をみた。
- (註 53) Cf. Lemaignier. *Le Gouvernement*, p. 28.
- (註 54) Lot, *Fidèles ou Vassaux ?* p. 248; Dumas, *Encore la question « Fidèles ou Vassaux ? »*, p. 198-199. 注の *Brussel, op. cit.*, I, p. 18 et suiv. は由米 *ルネ・ド・ブリッセル* の説である。
- (註 55) Dumas, *loc. cit.*, p. 188 et *passim*; Lemaignier, *Recherches*, p. 91-92.

## 附 記

本稿は昭和42年度科学研究費補助金(各個研究)による「中世フランスにおける *Hommage* の研究」の一部をなす。



## LETTRE DE FULBERT ÉVÊQUE DE CHARTRES

—Essai d'interprétation visant à éclaircir  
la «féodalité» au début du XI<sup>e</sup> siècle—

par Hiroshi MORI

M. J. -F. Lemarignier a, tout récemment, constaté en se fondant sur la variation de la formule employée dans les diplômes royaux, que le caractère du gouvernement royal avait changé vers les années 1025/1028. Cette remarque est très importante à l'égard de la formation de la «féodalité», parce que M. F. -L. Ganshof a déjà constaté que l'apparition du nom «hommage» ne remonte qu'à 1030. Pour déterminer les notions juridiques concernant la relation dite «féodo-vassalique» à cette époque, il nous faudrait tenter une nouvelle lecture de la lettre très célèbre de Fulbert de Chartres adressée en 1020 à Guillaume le Grand, duc d'Aquitaine.

Les érudits ont bien remarqué qu'il s'agit dans cette lettre de deux catégories de devoirs : «fidelitas», devoirs négatifs et «consilium et auxilium» pour être digne du «casamentum», devoirs positifs. On a déjà trouvé que la plupart des six épithètes qui expriment les devoirs de la «fidelitas» avaient été empruntées aux «*Etymologies*» d'Isidore de Séville. Il nous semble que la mention de «consilium et auxilium» avait aussi été écrite en consultant, entre autres, la «*Collectio canonum*» d'Abbon de Fleury. Fulbert a donc écrit cette lettre comme une *explicatio* canonique pour incorporer deux actes juridiques en un même système.

Les fidèles qui manquaient à ces devoirs, étaient coupables, selon lui, «de perfide et de parjure». «Parjure», notion purement canonique, s'appliquait évidemment à l'infraction à la «fidelitas». Quant au fidèle «qui est indigne du bénéfice», est-il, lui aussi, puni canoniquement ? D'après la lettre d'Eudes II de Blois au roi

Robert (vers 1023), écrite tout vraisemblablement par Fulbert lui-même, on constate que le manquement à ces devoirs, non seulement au «*consilium et auxilium*», mais aussi au devoir de «*commendatio*» n'était sanctionné que par la perte d'*honor* (bénéfice).

Nous pourrions donc conclure qu'au début XI<sup>e</sup> siècle, il y avait parallèlement deux actes juridiques qui unissaient le «*dominus*» et le «*fidelis*». L'un, c'était la «*fidelitas*», canonique et *ratione personae*. L'autre, c'était la «*commendatio*», *ratione materiae* causant le «*casamentum*» d'une part et le «*consilium et auxilium*» d'autre part. Nous pourrions aussi suspecter concernant la question de «*Fidèles ou Vassaux?*», deux idées qui appuieraient la théorie du vasselage : c'est à savoir d'une part, que l'hommage ne jouait qu'un rôle accessoire et, d'autre part, que l'hommage personnel l'emportait au XI<sup>e</sup> siècle. Parce que ce fut l'hommage qui remplaça, vers 1030, la «*commendatio*», acte réel.